Title	CAN の認識様態的意味について
Author(s)	寺田，正義
Citation	聖学院大学論叢, 4(2): 89-103
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=747
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

CAN の認識様態的意味について

寺　田　正　義

On the Epistemic Meaning of CAN

Masayoshi TERADA

Among the modal auxiliaries, the semantic characteristics of CAN seem to be rather unique. While the rest of the modal auxiliaries have clear-cut distinctions between Root and Episteme, CAN looks fuzzy.

Coates (1983) says that CAN is the only modal auxiliary where the Root-Epistemic distinction is not found. She asserts that there is no epistemic meaning in CAN and that CAN'T is an invariant form which supplies the negative for the epistemic MUST paradigm.

The chief intent of this paper is to point out some deficiencies in Coates' theory, based on my investigation into the meanings of the modal auxiliaries in written and spoken English.

1．はじめに

それぞれの法助動詞にはかなり明確に分けられる２種類の意味・用法がある。たとえば，must であれば，(1)のａ．とｂ．は一般的な状況では意味の相違は明らかである。

(1)　ａ．You must be very careful.

　　ｂ．You must be very careless.

(1a)の must は「ねばならぬ」という義務を表し，(1b)の must は「にちがいない」という必然性・推量を表している。(1a)のような用法の意味を一般に，義務的意味（deontic meaning）とか，根源的意味（root meaning），あるいは，知的意味（cognitive meaning）と呼び，(1b)のような用法を認識様態的意味（epistemic meaning）と呼んでいる。本稿では，便宜上，前者をＲ用法，後者をＥ用法と呼ぶことにする。

ところで，can の場合は，事情がやや複雑である。Ｒ用法については概ね論者の見解は一致して

Key words;　Epistemic, Root, Modality, Semantic meaning, Fuzzy set

いるのだが，E 用法については，(2)のような否定文や疑問文の場合には一部の研究者を除いたら異論はないが，(3)のような肯定平叙文の場合についてはさまざまな見解がある。

(2) a. He can't be in his office.

b. Can he be in his office?

(3) He can be in his office.

本稿では，can に関する諸説を検討した後，収集した資料に基づいて，肯定平叙文における can の E 用法の存在の可能性について筆者の見解を述べることにする。

2. 肯定平叙文における can の意味解釈をめぐって

can の E 用法について従来の研究を調べてみると，次の 3 通りの見解があることがわかる。

1) can の E 用法を認める立場

2) can の E 用法を認めない立場

3) 中間的な立場

2.1. can の E 用法を認める立場

荒木・他（1977）は，

(4) a. He may be there now.

b. He can be there now.

のように，文の命題が現在の状態を表す場合は，E 用法の may に E 用法の can を置き換えることができるが，

(5) He may come tomorrow.

のように，未来の 1 回の出来事を表す E 用法の may に，同用法の can を代替することはふつうではない，と述べている。つまり，can の E 用法は認めるものの，後続の動詞が状態的か非状態的か，また副詞語句が 1 回限りを表すものか，習慣を表すものかによって can の容認性について制限が生じるという立場である。

Spasov（1978）は(4)はどちらも E 用法であり，possibility の意味において等価である，としている。

Close（1981[3]）は primary/secondary という用語を用いているが，以下のような定義を与えているので，R 用法/E 用法に対応するものと考えてよいであろう。次の(6)は secondary の例である。

(6) This can be the answer, I think. (=It is perfectly possible that the statement the speaker is making is true.) (p. 125)

注意すべきことは，may を secondary function に用いた場合には can とは意味が異なる，とし

ていることである。can が１つの可能性が開かれていることを意味するのに対して，may は２つないしそれ以上の可能性があることを示唆すると述べている。

(7) This may be the answer. (＝The answer referred to is possibly the right one but that there are other possible answers.) (p. 128)

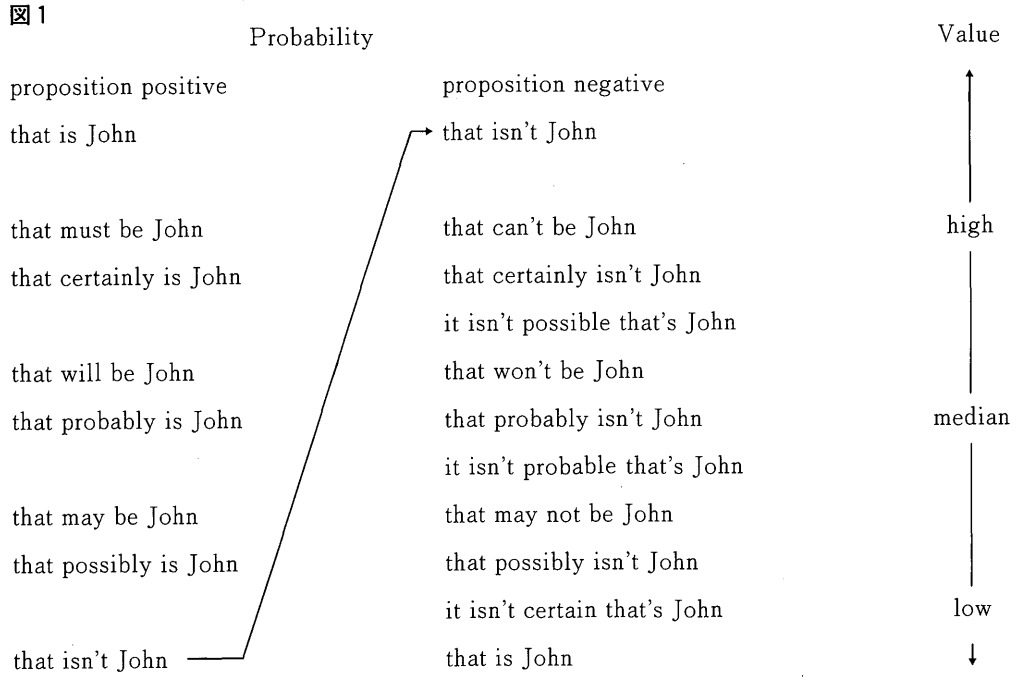
つまり，Close によれば，同じ環境で can/may が使われることがあっても意味は等価ではないということになる。

2.2. can のＥ用法を認めない立場

肯定平叙文における can のＥ用法を認めない立場の論考の多くは，理由を挙げて積極的に否定するのではなく，いわば，暗黙の了解事項として認めないというものである。Halliday (1985), Lyons (1977), Ota (1972) などが代表的なものであろう。

Halliday (1985) は，法性 (modality) を probability の尺度で図１のように示している。

図１



この図から分かるように Halliday (1985) は can't を強い否定の意味を持つものとして must の対極に位置づけているが，肯定平叙文の can はない。

肯定平叙文のみか，can そのもののＥ用法の存在を否定するのは，Coates (1980, 1983) である。Coates (1980) は，may と can の異義性を述べ，日常の使用においては両者には意味の重複

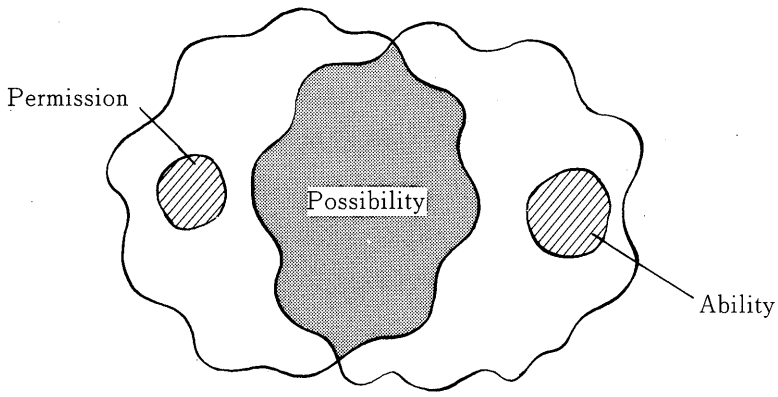
はほとんど起こらない。たとえ，「許可」（R 用法）の意味などで重複が起こるように見えても交換は自由にはできない，としている。さらに，(8)の may を can に置き換えられないのは，can が E 用法ではないからである，としている。

(8) You may be right, you may be wrong.

Coates は Spasov（1978）を批判して，(4b)は容認できない，と述べている。

Coates（1983）では，法助動詞の中で R 用法－E 用法の区別が存在しないのは can だけであるとしているが，これまでの議論の流れの中に入れるならば，can には E 用法はない，ということになる。Coates が採用した fuzzy set theory に基づく diagram（図 2）もそのことを示している。

図 2



Coates（1983）は，100万語にのぼる Lancaster Corpus と72万語以上のデータから成る Corpus of the Survey of English Usage を分析しているわけだが，この 2 種類のコーパスから得られた can の分布を次のように示している。

表 1

	Permission	Possibility	Ability	Gradience	Sample total
Survey	10	129	41	20	200
Lancaster	8	148	57	18	231

この表を見てすぐに分かることは，possibility の意味を持つものが圧倒的に多いということである。(9)が示すように，possibility を表す文は It is possible for で言い換えられるというが，これは Ota（1972）の R 用法の capability を表す用法に一致し，また，後に述べる Leech（1987[2]）の theoretical possibility や，Palmer（1979）の existential modality に相当することは注意する必要があるだろう。

(9) Lightning can be dangerous.≡ {It is possible for [lightning is dangerous]}

Coatesの論考で気になるのは，can のＥ用法を全面的に否定したがために，否定文と，とりわけ，疑問文における can の扱いが十分になされていないことである。Coates（1980）では，can't に関しては，わずかに脚注で，Ｅ用法の must の否定形を補完するものであると述べて⑽の例を挙げ，パラフレイズを同時に示しているにすぎない。

⑽ It sounds as though he can't be at Damion Sampson Hall any more. (＝It's not possible that he is at Damion Sampson Hall any more.)

Coates（1983）では，can't を invariant form と位置づけていることから，can とは，まったく独立した別個の単語という扱いをしているように思われる。そして，この can't はＥ用法の must と同様の統語的特性，つまり，進行形や完了形を後続させることができるので can't もＥ用法であると述べて，⑾の例を示している。

⑾ You can't have just given up painting completely....

疑問文については，明らかにＲ用法と思われる例を示しているだけで，たとえば，⑽や⑾から類推して作ることができる⑿，⒀のようなものについては検討されていない。

⑿ Can he be at Damion Sampson Hall?

⒀ Can you have just given up painting completely...?

2.3. 中間的な立場

Leech（1987[2]）はＥ用法－Ｒ用法という二分法をとらない立場に立ってはいるが，下図が示唆するところでは，possibility を表す can は may と同様にＥ用法に位置づけられているように思われる。

図 3

Permission/ Possibility	MAY CAN	MUST HAVE TO	Obligation/ Necessity

しかし，Coates のところで触れたように Leech は，can を theoretical possibility，may を fac-

tual possibility と区別し，パラフレイズも can は it is possible for ... to ～に，may は it is possible that ～のようになる，としていることから，can はむしろ R 用法寄りということになる。

Palmer（1979）は上述のように(9)や(14)のような can を existential modality と呼び，(15)のような E 用法の may とは区別している。

(14) Lions can be dangerous. (＝It is possible for lions to be dangerous.)

(15) Lions may be dangerous. (＝It is possible that lions are dangerous.)

Palmer は，existential modality は法性（modality）というよりも量化（quantification）を表す用法であり，(14)は 'Some lions are dangerous.' という意味である，としている。Palmer は existential modality の否定形は epistemic にひじょうに近いものとも述べている。

安井（1989）は，

(16) a．Prices can go up again.

b．Prices may go up again.

において，(16a)の can を E 用法であるとしながらも，(16b)とはニュアンスが違う，としている。(16a)は物価上昇の兆しが特に目につくというわけではなく，一般論として物価上昇はありうると，いわば，突き放した感じである。それに対して，(16b)は物価再上昇を占う場面的状況が眼前にある場合に用いうる，としている。安井は，結論として，肯定平叙文における can の E 的性格の強い用法は，may によって表される E 的用法に比べて，その守備範囲は極めて限られていて，E 的に用いられる can は，E 用法の must [not...] の肩代わりとして用いられる can't と，おそらく，その同類としてよい疑問文における can が典型的なものであり，肯定平叙文における can の E 的用法は，あるとしても，周辺的なものと考えてよいのではないか，と述べている。

2.4. 資料から見た can

ここでは，筆者が収集した資料を分析しながら，can の E 用法に関する筆者の立場を述べてみることにする。

Coates（1980, 1983）を検討したところで疑問点として述べておいたが，果たして，can には肯定平叙文のみならず疑問文にも E 用法はないのだろうか。また，can't をわざわざ，must の missing negative として，can とは別個の語として立てる必要があるのだろうか。Coates（1983, p. 44）にもあるように，E 用法の場合には進行形または完了形と共起する，という統語的な判定基準がある。R 用法で，完了形または進行形と共起したものは 1 例も見つかっていない，と Coates は述べている[1]。

そこで，次の 2 つの仮説を立て得るであろう。

1) 疑問文の中で，can と進行形または完了形とが共起していたら，それは E 用法の can である。

2) 1)が成り立つ場合には，Coates のように，can't と，少なくとも疑問文における can とを別関係の語と考える必要はない。

2.4.1. 疑問文における can と進行形/完了形との共起

調査した23点の小説，3点の映画シナリオ，12点の CBS ニューススクリプト集の中に，疑問文における can と進行形/完了形との共起の例は，数は少ないながらもある。疑問文における can と進行形との共起は2例(17a，b)，完了形との共起は1例⒅ある。(作品名は後述の一覧をご覧いただきたい)

⒄ a. What can he be doing under oak tree?——Murdoch (2), p. 69

b. What can he be doing beside well?——Murdoch (2), p. 69

⒅ 'What do you think it can have been, doctor?'

'Possibly cramp. Will you tell me exactly what happened?'——Christie (3), p. 115

これに加えて，もし，E 用法の法助動詞の特性である状態動詞（stative verb）（cf. Coates (1983) p. 44および p. 151）との共起の例があれば，上記の仮説が証明されたと考えてよいのではなかろうか。筆者の資料にはこれに該当すると思われるものが2例見つかっている。ただし，1例は間接疑問文である。

⒆ a. Waiting for a decision! In the name of God, why wait? What other decision can there be but to withdraw Montayne?——Hailey (3), p. 348

b. You know, I can't see what on earth there can be in that to put the wind up anybody.——Christie (2), p. 50

準否定語の hardly が使われている例も見つかっている。これは，否定表現が can't に限ったものではないこと，さらには，can't があくまでも，can の否定語であることの有力な証拠となるものであると思われる。

⒇ "Mr. Dyson calls his wife 'Lucky.' Is that her real name or a nickname?" asked Miss Marple.

"It can hardly be her real name, I should think."——Christie (6), p. 19

2.4.2. 肯定平叙文における can

E 用法の特性は上述のように，進行形または完了形との共起が存在し得るかどうかによるわけだが，肯定平叙文における can との共起の例もある。筆者の資料の中に，完了形が2例(21a，b)あり，さらに，一種の間接話法と言える Narrative の中に，完了形と進行形が並んで出てくる例㉒も見つかっている。㉒は，時制の一致を解いた場合に，can の読みも可能であろう，という例になるわけである。

㉑ a. "Let me look again." Frances straightened up with a frightened face. "Do you think there <u>can have been</u>—an accident?" ——Murdoch (3), p. 262

b. They can even have spit all over the pillow and they still look right.——Salinger p. 166

(22) Miguel had been wondering if he had made a mistake in not letting Rafael kill the old woman on the parking lot. She might not have believed the phoney story about what she had seen being part of a film. By now she could have spread the alarm. Descriptions could be circulating.——Hailey (1), p. 113

安井（1989）は，肯定平叙文における can はごく制限された中で，いわば，周辺的な用法として存在するのではないか，と言っているが，安井には，その事例が与えられていない。

(21)の場合は，明らかに，can と完了形とが共起しているわけで，この例は，肯定平叙文においても can の E 用法が存在することの有力な証拠となるだろう。しかし，なにぶんにも実例が少ないので，E 用法の存在を支持する何か別の証拠を見いだす必要があるだろう。このように考えてくると，すぐに気付くのは，E 用法の may も must も状態動詞を取るのがふつうである，という点である。この条件に合致するものとして，Leech（1987[2]）が theoretical possibility として挙げているものの一部(23)や，Palmer（1979）が existential modality として挙げている(24)などがある。これらは，安井（1989）の言う，境界領域のものということができるのではなかろうか。

(23) This illness can be fatal.

(24) Lions can be dangerous.（=(14)）

しかし，これらはいずれも，It is possible for ～ to ... とパラフレイズされるのが自然であるので，Coates（1983）に従えば，R 用法の possibility を表すもの，ということになり，(25)，(26)が E 用法として自然なのとは異なるわけである。

(25) a. This illness may be fatal.

b. This illness must be fatal.

(26) a. Lions may be dangerous.（=(15)）

b. Lions must be dangerous.

canの E 用法の存在領域を探る上で考慮しなければならないもう 1 つの点は，Coates（1983）の言う，R 用法で possibility を表す can の生起条件を知っておくことである。E 用法を探る場合に，この範囲を除外しなければならないからである。

Coates は R 用法 possibility の典型的な例として(27)を挙げている。

(27) a. well I think there is a place where I can get a cheap kettle (p. 95)

b. We believe that solutions can be found which will prove satisfactory (p. 96)

これは，may の R 用法 possibility の例として挙げているものと条件が類似している。

(28) a. I am afraid this is the bank's final word. I tell you this so that you may make arrangements elsewhere if you are able to. (p. 132)

b．but some years of experience suggest two or three guiding principles by which the speaker's efforts may be judged. (p. 141)

つまり，動作主動詞（agentive verb）と受動態がR用法の特性と言うことができる。E用法の存在の可能性を探る場合はこれを除外すればよいということになる。

筆者の資料には，このような境界領域にあると思われるものが，28例見つかっている。ここでは，典型的なものと思われるものを取り上げ，若干の検討を加えてみることにする[2]。

(29) a．Briskly, Rita related what she had learned, telling Patridge, Minh and O'Hara; "This can be big...."——Hailey (1), p. 22

b．... that someone can seem, and in fact be, quite different with one person from what he is with another.——Murdoch (3), p. 26

c．"... And anyone can be late once in a while."——Sheldon p. 263

d．But you don't have to be a bad guy to depress somebody—you can be a good guy and do it.——Salinger p. 175

この4例を見ると，(29a, b)と(29c, d）とでは，微妙な差が存在するように思われる。4例とも主動詞は状態的であり，その限りでは変わりはない。しかし，後にくる形容詞は，(29a, b)は状態的で，(29c, d)は非状態的である。Palmer（1979）によれば，どちらかというと，R用法的に解釈されている existential modality の場合は，sometimes または，some＋複数名詞を使ってパラフレイズができる，という。(29c)の once in a while は sometimes と言い換えることができるので，ちょうどこれに該当する。(29a)は，(29c)に似ているように見えるが，This can be big はストーリーの文脈から「これはビッグニュースかもしれない」という意味にとることができ，この場合の This は眼前の一回限りの出来事を指しているので，sometimes や some をもってパラフレイズすることはできない。

(29b)の seem は典型的な状態動詞であって，Ota（1972）によれば，E用法の法助動詞との共起がふつうで，R用法との共起は異常である，とされているものである。

(29d)の good は非状態的であり，さらに，can は非状態動詞の do とも結び付いているので，R用法的ということができるだろう。

以上のように考えると，(29a, b)の can はE用法であり，(29c, d)は，R用法である，ということになる。すでに述べたように，肯定平叙文の中で，can が完了形または進行形と共起する可能性があるわけで，can＋動詞の原形の形でE用法が存在してもよいはずである。そのE用法の生起する条件はどうやら，①動詞も形容詞も状態的であること，②一回限りの特定の事実に言及するときに限られる，ということになりそうである。

3．could の E 用法について

can の E 用法は，たとえ存在するとしても，きわめて限られた条件の下で生起するらしいことを見てきたわけだが，それに対して could の E 用法は may や might と同じような条件下で比較的自由に出現するように思われる。could がなぜ，また，どのように E 用法として使われるかを調べることを通して，canの E 用法の生起条件が絞れる可能性もあるわけである。ここでは，先行研究を簡単に見た後で，could の統語的な特性を資料に基づいて検討する。

3.1. 従来の研究

荒木・他（1977）は，E 用法の法助動詞の過去形は，現在の（すなわち，発話時の）控え目（tentative）ないし仮想的な（hypothetical）話者の判断を表す，として could については，(30)を例示している（p. 354）。

(30) The road could be blocked.

Leech（1987[2]）は，might も could も factual possibility を表す may の代用として頻繁に用いられ，その意味は，仮想的な助動詞が「予想に反して」（contrary to expectation）という含意を持つので，「可能性の表現」に，控え目で慎重な（tentative and guarded）意味合いを添える，としている。Leech は(31)のような文は，'It is barely possible that...' または，'It is possible, though unlikely, that...' とパラフレイズできる，としている。これは，すでに見てきたように E 用法の意味特性を備えているということができる。

(31) There could be trouble at the World Cup match tomorrow.

Coates（1983）は，may も might も E 用法のときには，「命題に対する話者の確信の欠如」（the speaker's lack of confidence in the proposition expressed）を表すもので，双方とも「（言質をとられないための）ぼかし表現」（hedge）で意味の差はない，としている。さらに，might は 1 つの独立した語として，E 用法の may に取って替わろうとするほどの勢いになっている，と述べている（p. 153）。may や might は「ぼかし表現」でありながら，その意味するところは，probably (might well) から，tentative possibility までをカバーするのに対して，could は tentative possibility のみを表すように見える，と Coates は述べ，Leech（1987[2]）とは若干ニュアンスの違う見解を示している。Coates は could と進行形との共起の用例がないので，この共起は起こらないようだと述べている（p. 166）が，筆者の資料には 3 例見つかっている。

(32) a. Surely the same man could not be standing by Gina and coming in by the door.
——Christie (5), p. 86

b. Who could be calling on him at this hour and ringing his bell with such dreadful

urgency?——Murdoch (5), p. 56

c. There could be drifting apart.——Murdoch (5), p. 437

Coates (1983) は，E 用法の可能性を表す法助動詞が十分に存在するのに，なぜ，could にもこの用法が存在するようになったかの理由は，might との類推で生じたというのがもっとも簡単な説明であるとし，現代用法では，might には欠けるようになった「ためらいがちな可能性を述べる E 用法」(tentative Epistemic possibility) の意味を埋める役割を果たすようになっているのではないか，と述べている (pp. 166-67)。この点では，Leech (1987[2]) とほぼ同様の見解である。

Palmer (1979) は，could は扱いが非常にむずかしいと述べ，最終的には，あくまでも theoretical possibility を表すので，E 用法よりは dynamic modality に属するものである，としている。

Quirk *et al.* (1985) は，(33)を例示して，could/might が E 用法の may の関連語として tentative possibility を表す，としている。

(33) a. There could be something wrong with the light switch.

b. Of course, I might be wrong.

3.2. could＋動詞の原形

3.1.で明らかなように，Palmer (1979) 以外の大部分の研究者が could の E 用法を認めているわけだが，統語的特性については，Coates (1983) を除いては触れていない。Coates は進行形との共起はないようだ，としたが，それに対して反証となると思われる例を(32)で示しておいた。ここでは，意味解釈の上で，カギを握ると思われる could＋動詞の原形がどのような条件の下で使われているかを検討していく。

E 用法の could がどのように使われているかを実際に調べてみると，興味深いことに，小説などよりもむしろ，映画のシナリオや CBS ニュースのスクリプトにより多く見出すことができるということである。これらは，純粋な音声資料ということはできないが，現代の口語表現の動向をかなり忠実に反映しているものと考えてよいだろう。(34)は典型的な例と判断できるものである。

(34) a. "Could be a monkey or a ... or an orangutan or something."——SCREENPLAY (1), p. 40

b. "Well, how long do you think she's gonna be out?"

"I'm not quite sure. She received quite a shock. It could be for a few minutes."——SCREENPLAY (2), p. 44

c. "On the other hand, it could just be an amazing coincidence. Damn! Gotta fix that thing."——SCREENPLAY (2), p. 62

d. But as a group of senators recently warned President Bush, if the Federal Reserve raises rates too high, there could be grave risks.——CBS NEWS (5), p. 13

3.1.で触れたように，could の E 用法が「控え目な可能性」(tentative possibility) ないし「仮想的な」(hypothetical) な話者の判断を表すという点では，多くの研究者の意見は一致しているし，このことは，(34)を見ても確かなように思える。恐らく，仮定法が本来意味する「ありえない」という気持ちを，そのまま流用して，断定性を弱める効果を生み出す表現になっているものと考えられる。(34d)のように，直説法の現在形を含む if 節と E 用法の could との共起は，仮定法と直説法との間の不安定で宙ぶらりんな印象を与え，そこから，「控え目な可能性」の意味が染みだしてくるように思われる。

ところで，(34)の could をそっくり can に置き換えた(35)は，E 用法としては受容しにくいように思える。少なくも，could と同義にとらえることはできないようである。

(35) ? a. "Can be a monkey or an orangutan or something."

? b. "Well, how long do you think she's gonna be out?"

"I'm not quite sure. She received quite a shock. It can be for a few minutes."

? c. "On the other hand, it can just be an amazing coincidence. Damn! Gotta fix that thing."

? d. But as a group of senators recently warned President Bush, if the Federal Reserve raises rates too high, there can be grave risks.

could が，上で述べたように，仮想的な，一歩退いた確信のなさのようなものが付与されるために，may と極めて近い意味になるのに対して，can の場合は positive な，つまり，話者の確信があけすけに言い表されるように受け取られるので，避ける傾向があるのかもしれない。

4. おわりに

以上，Coates (1980, 1983) を最も多く引用しながら，考察を進めてきたわけだが，筆者の資料によると，次の点で，Coates とはちがった結論に導かれるように思われる。

1) Coates は，疑問文における can の E 用法を認めないが，2.4.1.で述べたように，疑問文における can と進行形および完了形との共起の例が見つかっている。さらに，can＋動詞の原形にも E 用法と思われるものが見つかっている。したがって，疑問文における can の E 用法は存在するものと考えられる。

2) 2.4.2.で述べたように，肯定平叙文においても can と完了形との共起の例があり，さらに，進行形についても，時制の一致を解けば can と共起していると解釈できるような例が見つかっている。したがって，can＋動詞の原形の場合は，「ぼやけ集合」(fuzzy set) のような形で，きっぱりと裁断できない例が多数存在するのであるが，統語的な側面から判断すると，肯定平叙文にも can の E 用法は存在するように考えられる。

3) Coates は，could と進行形の共起はないとしているが，3.1.で述べたように3例見つかっている。したがって，統語的特性においては，can と変わりはないように考えられる。

最後に残された問題は，果たして，肯定平叙文にE用法の can＋動詞の原形が存在するかどうか，ということである。これまで述べてきたことを総合すると，動詞および形容詞が状態的であるときにE用法が存在するように思える。このように考えてくると，一般に言われるように，may のE用法については，非状態動詞も取り得るのに，must の場合には，状態動詞に限られるということとの関連である。つまり，can は must に近い意味を持っているのではないか，ということである。これは，must not の補完形として can't が存在する，ということと符号する。さらに，Coates（1983）も言っているように，might well が must の本来的な意味である probable の意味を持つということとも関連する。つまり，may も形を変えると，must の意味に近づくということは，must，may，can には意味的なつながりがあるのではないか，ということである。このように考えてくると，はじめのほうで紹介した，Halliday（1985）の probability の尺度（図1）が思い起こされる。この尺度の must と may との間のどこかに can を位置づけられないか，という推論である。しかし，村田（1988）が指摘するように，can の positive な意味あいが，かなり，断定的，あるいは執拗なニュアンスを与えるために，聞き手（読み手）に不快感を与えるのではないか，そのために，使用頻度が下がるのではないかと思われる。結論的には，安井（1989）の言うように，周辺的な位置づけを与えておくのが，妥当のように思われる。

註

1 R用法における進行形との共起については，Ota（1972）および Terada（1989）を参照のこと。

2 資料的な価値の観点から，周辺的と思われる例をすべて挙げておく。

A．直接話法の中で

(1) "There need to be changes in our news format."
"There can be." Chippingham told him.——Hailey (1), p. 133

(2) "With a kidnapping, Mr Sloane, publicity can be harmful...."——Hailey (1), p. 147

(3) "I don't believe that anyone as emotionally involved as I am at this moment can be objective about that."——Hailey (1), p. 189

(4) ".... Defacing the currency can be a criminal offence, though it's seldom, if ever, enforced...."——Hailey (1), p. 415

(5) "... It's important because the area is part of the Selva, where jungle diseases abound and can be fatal...."——Hailey (1), p. 545

(6) "The jungle can be a friend; it can also be an enemy," Fernandez pointed out.——Hailey (1), p. 567

(7) "If this operation is as big as you say, it can also be dangerous...."——Hailey (2), p. 151

(8) "I know what you're thinking, Andrew—that power can be obsessive and corrupting."——Hailey (3), p. 45

(9) "Living proof that an outstanding woman, occasionally, can be every bit as good as a man."——Hailey (3), p. 48

(10) "This place needs scouring, painting, organizing, but it can be beautiful...."——Hailey (3), p. 52

(11) "... I have to warn you—my mother won't know either of us, or why we're there. The effect can be depressing."——Hailey (3), p. 200

(12) "... The harmful part is called a side effect, though there can be harmless side effects too."——Hailey (3), p. 352

(13) "... Obviously some caution—a lot of caution—about new drugs is needed, but too much can be bad...."——Hailey (3), p. 413

(14) "I can be a good friend." he said quietly. "Let us hope that you and I are never enemies."——Sheldon p. 150

(15) "Once Sylvia has made her mind up she can be obstinate as the devil."——Christie (2), p. 139

(16) Enthusiasm in itself can be extremely wearing, Miss Marple thought.——Christie (5), p. 62

(17) "But by the very nature of things, none of them can be suspect in this case."——Christie (5), p. 108

(18) People who can be very good can be very bad, too.——Christie (5), p. 215

(19) "Men can be extraordinarily obtuse," said Evelyn thoughtfully.——Christie (6), p. 69

(20) "Maybe not," said Donald, "but Demoyters can be quite unpleasant enough on his own account."——Murdoch (1), p. 138

(21) "You realize, I suppose," she went on, "that your parents have paid in advance for tuition and meals up to the end of next term, and there can be no question of refunding that money?"——Murdoch (2), p. 12

(22) I can be quite sarcastic when I'm in the mood.——Salinger p. 25

(23) She can be very snotty, sometimes. She can be quite snotty.——Salinger p. 173

(24) —I told you she can be snotty when she wants to.——Salinger p. 215

(25) But I have hurt them both badly and neither one can feel very good.——Hemingway (1), p. 103

B. 間接話法相当表現の中で（時制の一致を解けば，canの読みが可能なもの）

(1) "If you ask me," said Evelyn Hillingdon, "I don't think he ever liked to admit that there could be anything the matter with him or that he could be ill...."——Christie (6), p. 40

(2) She would have to be quick about what she wanted to say. There could be no leading up to things.——Christie (6), p. 54

参考文献

(1) 荒木一雄・小野経男・中野弘三. 1977.『助動詞』現代の英文法 9. 東京：研究社.

(2) Close, R.A. 1981[3]. *English as a foreign language.* London: George Allen & Unwin.

(3) Coates, Jennifer. 1980. "On the non-equivalence of may and can". Lingua 50, pp. 209-20.

(4) _____. 1983. *The semantics of the modal auxiliaries.* Kent: Croom Helm.

(5) Halliday, M.A.K. 1985. *An introduction to functional grammar.* London: Arnold.

(6) Leech, Geoffrey. 1987[2]. *Meaning and the English verb.* second edition. London: Longman.

(7) Lyons, John. 1977. *Semantics.* Cambridge: Cambridge University Press.

(8) 村田純一. 1988.「can の epistemic 用法について」.『現代の言語研究』pp. 226-238, 東京：金星堂.

(9) Ota, Akira. 1972. "Modal and semi-auxiliaries in English." The ELEC Publications. Vol. 9, pp. 42-68.

(10) 太田朗. 1980.『否定の意味』東京：大修館.

(11) Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., Svartvik, J. 1985. *A comprehensive grammar of the English language.* London: Longman.

(12) Palmer, F.R. 1979. *Modality and the English modals.* London: Longman.

(13) Spasov, D. 1978. *The verb in the structure of English.* Sofia.

(14) Terada, Masayoshi. 1989. "The meaning of 'I must be going'" 聖学院論叢 第 2 巻. pp. 183-197.

(15) 安井稔. 1989.『英文法を洗う』東京：研究社。

資　料

(1) Christie (1)：Christie, Agatha. *The seven dials mystery.* Fontana. 1954.
(2) Christie (2)：Christie, Agatha. *Why didn't they ask Evans?* Fontana. 1956.
(3) Christie (3)：Christie, Agatha. *The thirteen problems.* Fontana. 1965.
(4) Christie (4)：Christie, Agatha. *Three-act tragedy.* Fontana. 1957.
(5) Christie (5)：Christie, Agatha. *They do it with mirrors.* Fontana. 1955.
(6) Christie (6)：Christie, Agatha. *A Caribbean mystery.* Fontana. 1964.
(7) Murdoch (1)：Murdoch, Iris. *The sandcastle.* Penguin Books. 1957.
(8) Murdoch (2)：Murdoch, Iris. *The flight from the enchanter.* Penguin Books. 1956.
(9) Murdoch (3)：Murdoch, Iris. *The red and the green.* Penguin Books. 1965.
(10) Murdoch (4)：Murdoch, Iris. *The severed head.* Penguin Books. 1961.
(11) Murdoch (5)：Murdoch, Iris. *An accidental man.* Penguin Books. 1971.
(12) Hailey (1)：Hailey, Arthur. *The evening news.* Corgi Books. 1990.
(13) Hailey (2)：Hailey, Arthur. *Overload.* Pan Books. 1979.
(14) Hailey (3)：Hailey, Arthur. *Strong medicine.* Pan Books. 1985.
(15) Drabble ：Drabble, Margaret. *A summer bird-cage.* Penguin Books. 1963.
(16) Greene ：Greene, Graham. *Twenty-one stories.* Penguin Books. 1981.
(17) Steinbeck ：Steinbeck, John. *Of mice and men/ Cannery Row.* Penguin Books. 1949.
(18) Hemingway (1)：Hemingway, Ernest. *A farewell to arms.* Penguin Books. 1935.
(19) Hemingway (2)：Hemingway, Ernest. *The old man and the sea.* Penguin Books. 1966.
(20) Fitzgerald ：Fitzgerald, F. Scott. *The great Gatsby.* Penguin Books. 1950.
(21) Anderson ：Anderson, Sherwood. *Winesburg, Ohio.* Penguin Books. 1947.
(22) Salinger ：Salinger, J.D. *The catcher in the rye.* Penguin Books. 1958.
(23) Sheldon ：Sheldon, Sidney. *The other side of midnight.* Fontana. 1973.
(24) SCREENPLAY (1)："E.T.", screenplay by Melissa Mathison. Charles Tuttle. 1988.
(25) SCREENPLAY (2)："Back to the future Part 2", screenplay by Bob Gale. Charles Tuttle. 1991.
(26) SCREENPLAY (3)："Driving Miss Daisy", screenplay by Alfred Uhry. Charles Tuttle. 1991.
(27) CBS NEWS (1)-(12)："Super ELMer" NO. 1-NO. 12. SIM. 1989.